

燕石雜志

馬亭

15  
1492  
1



門 5  
號 1492  
卷 1

飯臺簞笠立公羽著

燕石雜志

書行文金堂梓



35.2.1  
書



燕石雜志序



石非石荆玉非玉玉之多于天下  
瑤琅玕皆玉也然加一荆字者撫  
連城為萬乘器矣石之為物亦  
若何限也無性非石然流一石字  
為人捨我取之物未凡人莫不知  
玉勝於石而取懷之得罪者多矣  
不若傳拜石為丈韻致於今之高  
也曲亭馬琴子隨筆名以燕石蓋



人所捨不顧我氣為珍之意一日  
神之來示余為奪其帙上自天  
文廟堂之十一至與地里卷之細與  
不有馬援古証人解惑釋疑又  
間以佳話奇誤以所實為事讀  
者皆忘倦筆端不測麗如米家底  
密峰峙以年岫洞玲瓏弄之似雪  
蒸霧噴奇怪子小多態不能  
手措也抑美則死之用見之捨在

人之性情皆相同摘鼻造目橫人  
面不異為豕既已以此編之美而  
不謂捨之則世人亦死也死之  
馬琴縱欲獨自取令人捨之何  
有耳浪華書實文之至者在江戶也  
空萬為堂吐美之曰請梓行  
不見果人不捨得也此篇一出  
于上爭省者皆爾美之不能  
措矣亦如余其書愛美之矣



馬考性灑澤氏其先出於三河  
有祖先亦三河人也故余於馬考  
之空乃望音之與乃曾祖名興也  
卷武藏涼玉人真中全直次子  
諱興吉為嗣其出生於源賴政  
勇區猶隼太守資興吉子諱興  
義通兵法善擊劍射騎馬考者  
其孝子也少愛讀書長好著作  
自名其堂曰著作之維或擇史

以談無一毫涉淫猥象風化其志  
在使後世知脩其身齊之家全其名  
節矣不亦大勝夫腐儒輩頭中  
深名與卑比據枳梧張門戶象徒  
弟講理談性辨彼罵此好為人  
師一終無益名教者乎文全弟友  
二書賈與馬考同諱冠余言於此  
編遂以此為序

文化七年庚午上元日



北山老逸撰

小笠原史書

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 山, 老, 逸, 撰, 史, 書.

茨石雜誌總目錄

卷之壹

- ① 日の神
- ② 更鐘
- ③ 正五九月
- ④ 丙午
- ⑤ 十二獸
- ⑥ 奴婢之

卷之貳

- ① 古評の訛
- ② 人に贈るの評
- ③ 房下
- ④ 夕立
- ⑤ 閑雲長
- ⑥ 漢壽亭侯印
- ⑦ 早鬼大臣
- ⑧ 五噫歌
- ⑨ 怪の
- ⑩ 九尾
- ⑪ 物の名
- ⑫ 檀那
- ⑬ 白人
- ⑭ 苗字
- ⑮ 大人先生
- ⑯ 詩歌吉凶



卷之二

- ① 鬼神餘論
- ② 蟬丸
- ③ 關東
- ④ 惡禪師
- ⑤ 正儀義隆
- ⑥ 關東方言
- ⑦ 鬼大手柄
- ⑧ 桃方郎
- ⑨ 一休詠評
- ⑩ 八幡方郎
- ⑪ 浅草事實
- ⑫ 地名の訛謬
- ⑬ 四時代謝
- ⑭ 狂歌
- ⑮ 折端
- ⑯ 句の花
- ⑰ 五の夜
- ⑱ 鬼神論
- ⑳ 六郷橋
- ㉑ 西江月
- ㉒ 聯句連歌
- ㉓ 陰陽之數
- ㉔ 家訓稿餘

卷之三

- ① 團頭
- ② 蕨入
- ③ 猴蟹合戦
- ④ 俗咒方
- ⑤ 田之恠
- ⑥ 奇異
- ⑦ 縣神子
- ⑧ 塞翁馬
- ⑨ 相摸取黒船
- ⑩ 西鶴
- ⑪ 羽川珍重
- ⑫ 實語教
- ⑬ 我末也
- ⑭ 天禄獸
- ⑮ 伊豆の海
- ⑯ 六郷橋
- ⑰ 情死
- ⑱ 西江月
- ⑲ 聯句連歌
- ⑳ 陰陽之數
- ㉑ 家訓稿餘
- ㉒ 花咲翁
- ㉓ 猿猴生贖
- ㉔ 浦嶋之子

葵石雜誌總目錄完







數百年前ある史傳より。近日の巷談まで。彼此となく抄録し。これより。加ふる愚考をとり。實に警を醸するの所あり。

○字音の假名遣を正ユズ。傍訓細まう。續まう。且。刑人を勞

もんを厭へ。シヨウをセウと。テヤウをテウとする類多あり。

本文といへども。備書のおも。陽をわめるべし。予が著述書肆。清索を

らる。年の年中數十巻。の故。更。校。及。備書嶋岡生

が清書。刊刷氏。屬と。

○予好。古人の隨筆を觀る。千萬言。取。の。く。らる。

同の批評。獻。り。裏編。暗合。の。宜。披。閱。者。の。筆。削。了

任。と。べ。し。

○予好。古人の隨筆を觀る。千萬言。取。の。く。らる。

高儒といへども。瑣言。勝記。と。る。至。て。送。漏。る。を。け。し。國。學。家。の。儒。佛。を。論

じ。る。も。又。如。此。る。べ。し。及。予。が。淺。陋。を。以。論。說。を。不。儒。佛。神。雅。言。俗。語。に。至。り。て

一も漏るべし。を。批。評。する。と。ん。ん。と。大。方。の。嗤。笑。を。羞。

○この書。豫。考。正。し。著。述。と。る。又。刊。行。小。ら。る。り。た。り。と。吾。家

の。ゆ。き。ま。だ。一。記。し。たる。日。書。肆。又。豪。棄。せ。ら。れ。て。を。削。去。し。と。す。昔

漢の王。元。の。論。衡。七。十。六。篇。を。著。し。篇。を。自。己。の。傳。を。紀。載。と。今。これ

儼。ん。と。と。る。よ。オ。の。比。と。べ。た。り。の。み。これ。彼。謝。豹。の。入。と。羞。し。終。り。と。る。こ。の。一

の。を。を。ま。じ。り。け。れ。ど。も。所。難。の。と。い。ひ。も。明。て。と。あ。り。隠。る。よ。う。な。を。の。り。す

ん。小。人。無。罪。抱。玉。而。有。罪。玉。を。擇。む。獨。喜。し。て。燕。石。を。白

く。の。罪。を。く。ん。が。お。も。漫。自。天。一。遂。と。筆。を。磨。く

文化六年己巳春三月上己。叢書。隱居題。於。飯。台。

著作一堂

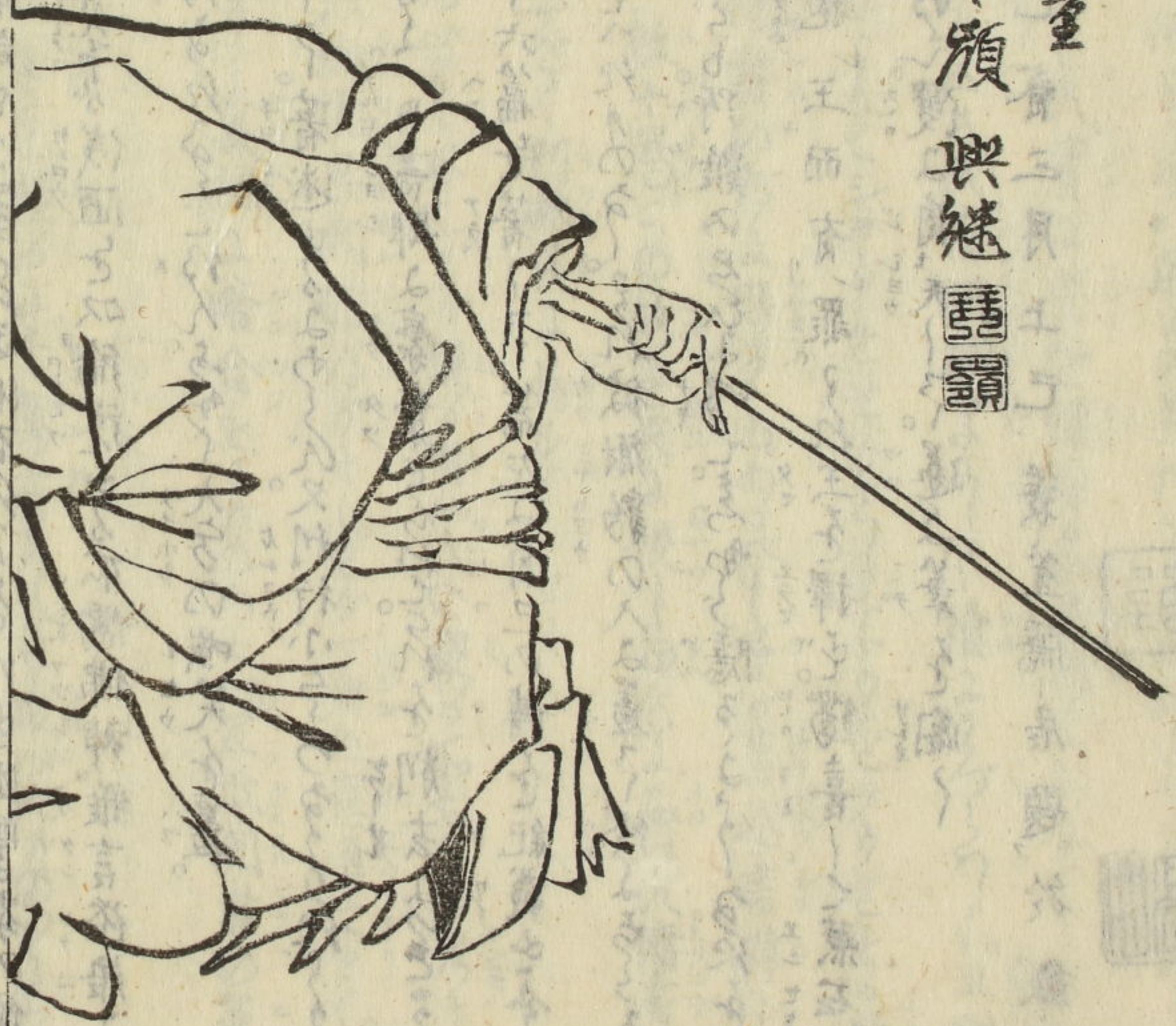




十二臺

琴履興繼

琴履興繼



卷之六

琴履興繼

草中誤說將

車馬

立上曾易踏

士羊

琴履興繼













三 更 鐘 更ハ漏刻の爲ニ用之連車  
宮漏有六更。君王得景起。

時ノ鐘鼓をうらと和漢のつれの時よりとつらうを詳よてん事物紀原云  
更一點起於易繫九事重門擊柝之說自黃帝時也。と  
りり按むらよ易繫辭下傳云。重門擊柝以待暴客蓋取諸  
豫と云えたり柝ハ拍子木とれハ都城の門子暴客の来るをえり拍子木  
と鐘とて也也更点より異らうん致六更のる宋の共邁が俗考よりえたり  
尤と抄録と

俗一考云。漢書候士百餘人。五十分夜擊刁斗。○解按正史通考  
註古者軍有刁斗此予有刁斗之刁音報並  
改刁爲刁不知史傳有刁斗無刁斗不讀 自守師右曰。夜有五更。故  
分而持之。唐六典大史門典鐘二百八十人。掌鐘一漏  
正五振。通片二十五。而及州縣更漏皆去五更後二  
點。又并初更去其二點。首尾止二十一點。至今仍之

故曰。一更三點。禁人行。五更三點。故人行。宋大初以  
鼓多驚寢。遂易以鐵磬。此更鼓之變也。或謂之鉦。即  
今之雲板也。衛公兵法曰。鼓三百三十三。槌為一通。  
角吹十二。聲為一疊。鼓止角動也。司馬法曰。密鼓四  
通為大鼓。夜半一通為晨戒。旦明二通為發餉。今  
早一晚各止一通。其鐘聲則一百八撞。以應十二月。二  
十四氣。七十二候之數。この後よりんが更点ハ秦漢以前既よん  
あり或ハ鼓をりり或ハ鐘をりり或ハ鉦をりり。と衛公の鼓の二百三  
十三槌。宋朝の鐘声一百零八。天朝の鐘声七十二。この十二時よ各二  
鐘とを加え合へり。一百八とる。とれハその教宋の鐘声と同ト。つれの更時  
時の鐘のハ大玄經よ又先ハ南音常志あり亦その注ハ懼阿含經を引く時の  
鐘の正を載ん。此の鐘は舒明紀小天皇八年乙丑朔。大流王謂











一時正初十刻あり一更五五刻あり十二時十二刻と配當し一唱二唱の和漢  
今昔の國あり我俗鐘声の國て己時を四時午時を九時と唱る  
るの本据あり三正俗解もられを辨む今世の大同の衣服の新  
舊を論じこれいハッ比彼の七ッ比とどりか昔午の時申の時といふ  
致さるこの俚語も又在り方平記は武者の出立をりか知りてこの時を燈  
直垂してと書く是則今俗の四ッ比といふが如く亦江戸の俗佛堂の母わく  
大念仏の合し心を鳴らんとをさるるは早晩よく暮  
勤行の入りあり

(三) 正五九月

正五九月を避るといふは宋の時の俗忌也本邦の障りもある事  
文前集云今之丁官者忌正五九月或謂宋朝火德  
火生於寅日也午墓於戌此三箇月謂之灾忌官廳  
例減祿料無羊故謂無羊之月喪皆避之陰陽家云  
武德詔此三月不行死刑禁屠殺又五雜俎云清  
雜志云佛法以正五九月為齋素月不誨宰殺足破  
答見といふ我俗の三箇月の娶招さ禁るといふといふるは

(四) 丙午 十二 附

五雜俎小吹劍録を引て云丙午丁未年中國遇之必有灾然  
亦有不盡然者即百六陽九亦如是耳曲亭子云我俗未  
と云丙午庚申の年を忌むとむ甚く或は丙午女子丙午の年を生るるは  
女をのさ人を食ふ或は丙午庚申の月女子をいれは子必盜賊と  
る故に庚申の日子丙午の月女子を生るるは子必名づらふ金をりて  
らるる絶る本流あり宋より以降人の命運を定むるのいふるは  
一丙午の年をの忌むるの目をかゝる忌といふるは年をさるるは



子月を忌む日をも忌むべし... 子丑寅卯の十二支...  
既より事ハ中ノ辨ミ... 丙ノ讀為火之  
兄。丙者言陽道著明故曰丙。正字通云。篆作丙亦作  
火。陽火也。从火。光天之下盛大發揚也。云。午亦陽火之  
四方小配也。とらへ南方乃四時配也。とらへ夏たり月配也。とらへ  
五月乃時配也。とらへ日中より故又丙午の年必火災ありとりの故り  
俗説より後より丙午の年大災ありとらへ壬子の年亦水厄ありとせん  
讀為水之兄。壬之為言任也。言陽氣任。艱于十也。とらへ  
陰屬也。四方配也。とらへ北方乃四時配也。とらへ玄冬乃月配  
也。とらへ十一月乃時配也。とらへ夜半乃世俗只丙午の年火災  
ありとらへ壬子の年亦水厄ありとらへ丙午の年亦信也。とらへ  
續とらへ... 偶然とらへ... 太一歲在午曰敦

敦盛也。祥壯也。言萬物壯盛也。亦云。午者陰陽交而  
得布。故曰午。とりの字書。午ハ情也。とりの字。情ハ逆也。達  
も續て情布ハ分布ハ阻礙不依順曰情。とらへこれらノ説より午の年  
も生れたる婦を忌むやあらんと。縁命家の説も生たる年をのぞき  
り。とらへ絶つ。とらへ丙午の年をりて生たる女も忌む。とらへ庚申の俗  
忌ハ進まらるべし。  
俗説。大約男子ハ二十五と四十二を厄年と。女子ハ十九と二十三を厄年と。と  
とりの或ハ二ハ陰の數五ハ陽の數。陰上より陽下より。故も男子  
も乃年二十五に至るりのを母も又四十二の數も陰も屬し。陽  
も。且四二を統て死と。男子最これを懼亦十九ハ十八雲乃數九ハ陽の數。とらへ  
その陰上より陽却下より。故も女子これを懼ス。二十ハその數陽を重  
且事の敦藉とらへを俚語ノ散とりの三三と數とらへ判せらるるをり











一 奴婢合所生子可後母事

捕亡令云。兩家奴婢俱逃亡。合生子並後母養解云。

釋官私奴婢與官戶家人。合生男女亦同。

案之於奴婢者律比畜產仍所生子皆後母也。

之の如く生たりこれの兩家の奴婢逃亡所合して子を生たればその母

亦屬らざる故の如くされば奴婢の畜産は比し母をば家の猫隣家の猫と

同いりの子を生たれば牡猫の如くあらば母の畜産の母なりと云ふべし

之の如く奴婢密通の子より生るる母は後母をば法ををばひあてまつ

る世俗女子の母は後母と云ふべし今も田舎の奴婢の合して産る子を

養子と号して藩士の家僕として生涯の進退を主人の如くせしむるは

古法に同書同義第五十一條云。

一 家人所生子孫相養可為家人事

戸令云。家人所生子孫。相養為家人。皆任本主。馳使

唯不得盡頭馳使及賣買。

素之至于累代賤職之類。子孫養而可傳。但臨時

追後之徒。苗裔絕而無仕矣。

これら如く家人子孫の如く臨時追後の徒ハ一季半季の奴婢を

いふらん子孫たるは後をばはるとなりと云

六 関雲長

演義三國志卷之一。宴桃園豪傑三結義。聖歎本云云。長

義と題を毎本題月又大同。とのみ関羽が相貌をいふところ。身丈九尺

髯長二尺。面如重棗。唇若塗朱。一塗脂。とあり重棗の棗は

赤棗を重棗といふ。五雜俎に云えられ。東を棗と誤る。故に

ざる棗の上へ又漆を塗りけたるを重棗と云ふ。重棗の棗の字は赤



を以てるやとある人のひりり後萬曆版の演義三國志を以てるやと曰  
薫業とありこれより後万曆版の演義三國志を以てるやと曰  
帯たるとばを薫る如しといふは勇士の相貌を以てるやと曰  
字の心を賤しと重きと悋りたりといふは勇士の相貌を以てるやと曰  
國の余象才が演義全像三國志評林 卷の五 関雲長 延津  
殊 文 魏とのみ版は曹操壽亭侯の印を鑄る張遼と関公と賈  
しふは愛ふと漢字を加えたり再び終りて関公笑ふ丞相といふは  
これよりついで遂に受たりとあるは金聖歎本よりの教行を削去て  
漢一とついで莫壽地名。亭侯爵名。俗本此一處多一能。今依  
古一本削去とあるは亦外書といふを辨むるは甚精細なり其聖歎  
發明のよありと王崇簡が冬夜箋記にも又この論あり  
王崇簡云。関雲長封漢壽亭侯。本亭名漢壽。今人

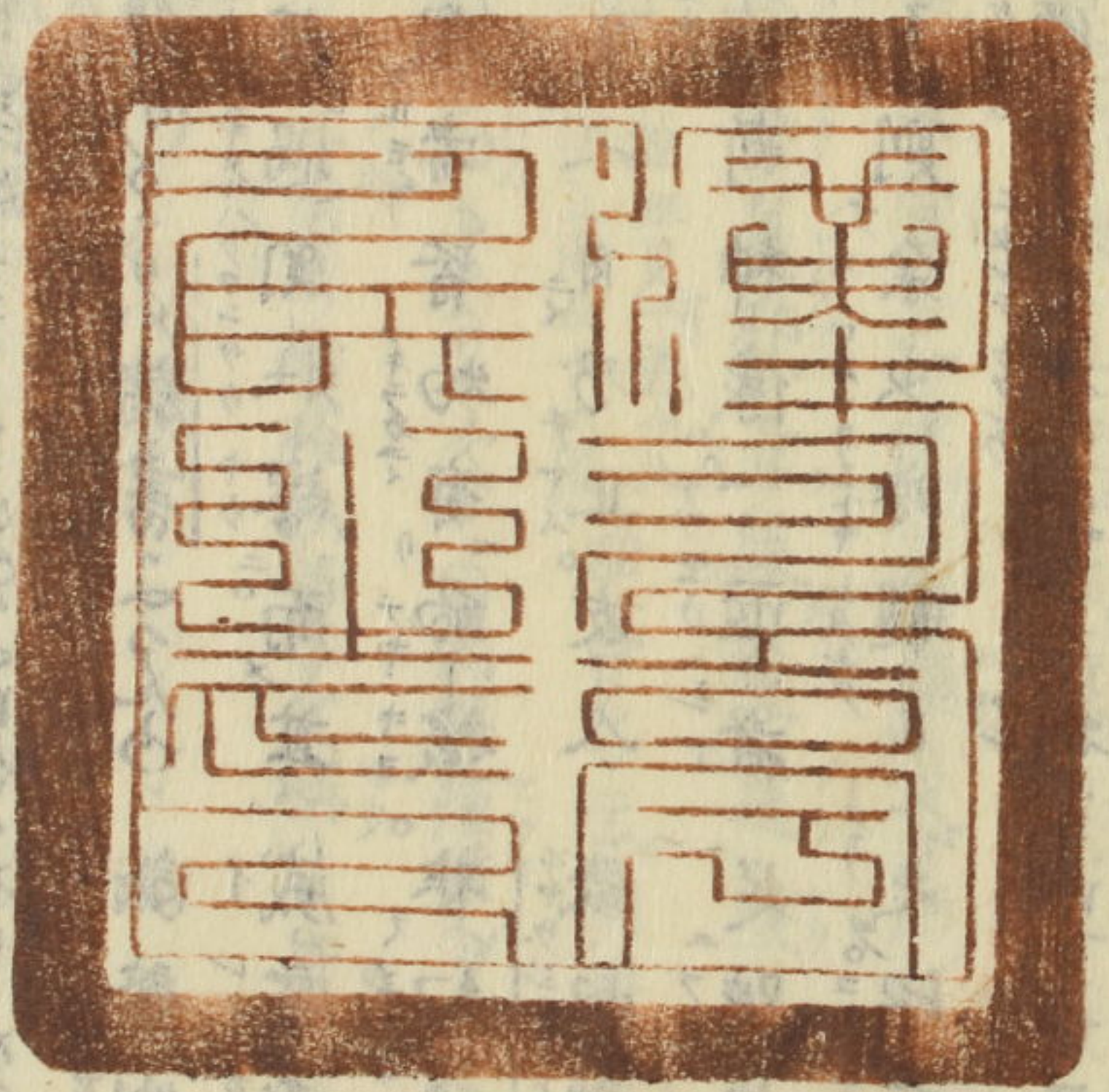
綱壽亭侯。以漢字屬上

つてええされどるは疑ふべからずあり 天朝天明四年二月廿三日  
關那河郡滋賀嶋の土中巨石のやう漢委奴國王印を掘りて  
ありその圖説好古日録にええたり亦同書に宣和集に載とあるの親  
魏委王の印を載たりされ漢魏共よその國号を印文に冠らり  
とよびし例を以て推して漢の壽亭侯と唱ふを悞るもいふは  
むのつて父國を封じたるは國号を稱するありともその土の長と  
りのを封じたるは國号を稱する例なりと難せん歟漢の季小至て諸侯  
叛てて盜賊蜂起し位を篡りての教ありてこの時よ當りて曹操執政し  
將を封侯し其の印を鑄とありん漢の壽亭侯と稱するも由り  
といへり宣和集に載とあるの親魏委王の印の圖史にありて  
後への偽造なりともいふべし近属滋賀嶋の土中より掘りて漢委



叙國王印ハ好古日録の編者既ニ考ル所あり漢字を屬とするの證と云  
 べん欽金聖歎蜀志を引く大將軍費禕會諸將于漢壽といふ  
 ハ漢壽ハ亭の名なる多疑われりゆりといひ予首肯し之を決ぐ博覽  
 家カ  
 家カ  
 家カ

漢壽亭侯の印を唐山より唐と土中より知れり  
 良家民王を尊信りゆり印を鑄るその廟納るは所見ありと云  
 唐以前ハ宋より以後世人多くこれを信ぜり五雜俎  
 漢子勅封の漢壽亭侯の印あり入られををふら紙に打てしを  
 このタ雅別府志山別名迹志中載ざれば是否成る久又近時心城碑  
 のりら渡られしもその印の好古日録に載たり亦其の審裁りて



漢壽亭侯之印

漢壽亭侯之印

漢壽亭侯之印

漢壽亭侯之印



コレ心越ノ善ヲ来ル  
 モノニシテ關帝廟  
 ノ印カ下ニ撰ヌル  
 印ト大同小異  
 あり考ベシ



コノ印好古日録ニシテタリ編者ノ考ニ云備  
 心越撰ヲ来ルトコロ關帝廟ノ印トイフ今水戸ノ  
 佛刹ニオサム印丈四字ニシテ三字ハ蒙古字全一ハ  
 花押ナラシ疑ラズ胡元時鑄所ノ關帝廟ノ印大  
 ルハシトイヘリ



神の印と云ふ所のわづ是心越の境ありけるの致れを好古日録に載せる  
りのとせらる考るる大同小異あり予が眼を過るところの二種は過は孔  
明が陣太鼓長崎某の家の際中よりありりる南嶽が西遊記といふ  
ものこれ関所の印と云ふものなりと云ふはこれと撰する所のものなり  
関將が神灵感應の事諸書に云ふ謝肇淛云今天下神祠  
香火之盛莫過関社繆而其威靈感應載諸傳記及  
耳目所見聞者皆灼灼有據非幻也如福列亂之  
先神像自動三月乃止友人  
吾郡演武場新神像一匠者足踏其頂出嫚褻語無  
何僵仆而死則余少時親見之以右之張觀察竟文  
上計至桃源病革移入王祠中其兄日夜哀禱經七  
日復蘇親見神撰其魂以還張君言之歷歷如在目

前者亦異亦云王自唐以前未之有聞迨宋以鹽池  
一事遂著靈且張道陵於漢季為黃巾妖賊王以破  
書中起家而冥冥之中又聽天師號令使其偽耶則  
當顯儻之使其真耶吾未見道陵之賢於王也此蓋  
不可解者也五雜俎見于卷十五  
曲亭子云関將鍾馗が如本邦の画工  
それを画くと其の婦幼もろろの関將鍾馗あるとをある彼孔門の十哲の  
如死の却あつたりのよりり世俗兵勇を稱し奇を好むの賢者の世に  
あつたると云ふは故のり

七 早暹大臣

鐘馗ハ原菌の名なれど本草綱目并に諸類書亦に逸志を引く唐の  
玄宗帝の夢に終南山なる鍾馗の灵虚耗の鬼を退治せしを載る  
後よとも猿樂なること他より婦知もささくその名をたれりとも



虚説する所の最は井澤氏が俗説辨よりありたるは今俗にこれを鍾燿  
大長と稱し逸志に載りたるは終南山の鍾燿は茶芽の進士のりは又大長  
と稱する所の謂あり按ずるは源平盛衰記卷一五節の夜間鐘の辰は  
昔周成王の忠臣はキリウとりの兵あり依勸賞位至丞相早鬼大長と  
稱せしむるをえたりとのを誓の説を又傳のやあり鍾燿と早鬼と音  
近れをりて混とす鍾燿大長とりのをあらん盛衰記より早鬼の誤り  
考るべきを疑ふべし

ハ 五 噫 歌

耕巷茨花よりどりのほりてえればあむぐりたるもよひゆくをどしとせむ  
延喜日本紀竟宴和歌藤原時平、大鷲鷯天皇 仁徳 をうみたるあり 仁徳  
天皇の漸歌とす、民のあむとるうたりひのひまをりあやまれるあり  
とるひ、その書 標は盛衰記を引く延喜帝の御宇は飢饉疫癘

起るる天りは飢死とるりのまゝりり民の空電もみだりひ明迄せぬ御代に  
ちりりるれば右歌を思食せり

高れそよのほりてえれば烟なる民のあむとる旅ひよなり  
あむとるされしとるのあむ水鏡にあるをいひりてえれば右思接ぎ  
は水鏡仁徳紀の 四年とすうは二月はたつたろふのほりてえりとの民  
のあむとるをいひりてえりたるは今よりのらとる年たるをせとる  
あひのらちのほりてえりたるをいひりてえりたるは七年とすし、四月は又とるうのほ  
りて御覽がよしたるのあむとるはりひりてえりたるはあむとるをいひ  
りたるはのほりてえりたるは曲亭子云、盛衰記のあやまりひりてえりたるは水鏡  
のせよ假字の日本紀よりいれど高れ屋の御製日本紀に載られれば  
なほつる、時平公のあむを撰傳とるま

延喜六年日本紀竟宴和歌























くその虚實をさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり

同より鳥の雌雄をめでさすとさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり  
うらひとさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり  
群とさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり  
いりその比母のれ巽沖師の説よりさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり  
まゝのふれ訓は蛇足の辨をさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり  
志は雀部よりさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり  
とさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり  
さるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり  
の鳥を稱する字ありてさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり  
すめと訓もさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり

さるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり  
あつらひしところありてさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり  
愚接ぎは日本紀よりさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり  
さると留へてその秋雀よりさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり  
まゝ雀のそれよりさるべしめらるるごとく故事とありて人終に疑ふこと怪  
むべしなり

白氏文集古塚狐妖且老化為婦人顔色好頭變雲  
鬢一面變粧大尾曳作長紅裳徐徐行傍荒村路日飲  
菓時人靜處或歌或舞或悲啼華肩不舉花顏低忽  
然一笑千萬態見者十人八九送假色送人猶若見  
真色送人應過此彼真此假俱送人人心惡假貴真  
真一狐假一女妖害猶淺一朝一夕送人眼女為狐媚害  
即深日長月長溺人心何况寢粗色盡惑能發人家



覆人國君看為害淺深向。豈將假色同真色。曲亭子云  
世の童子ホヤムぐくこの詩を誦しつゝ狐の化しき美女とあれども人又  
を迷はるのを改むとの害淺深一真の女が狐媚をとりてはれその  
日月長く月長く人の心を迷はるれば廢椒妃が類人家改  
一人酒を覆ひ至まり豈假色をとりて真色と同くらんやといひ  
狐が人の婦とあり子を生りあはれ真の色は等白氏も真假を論  
むるよめいふらん一笑を發へ

○唐山演義の書に九尾の老狐化して妲妃となり紂王を迷惑せしむるを  
作ししふらふち好事のみのありき 近衛帝の宮嬪玉藻前も狐  
妖を作りしむらひ謡曲の滑稽あるが何人の序ありて後玉藻前も  
の怪談ありぬら草紙より写本より行はれ近曾繪より板に傳へ

よく行く行は九尾の狐といふ妲妃玉藻前もこと候も合点せり今法  
系九尾の狐の端獸は長氏春秋。高年三十一味娶行塗山。恐時  
暮失嗣。辭曰吾之娶必有應也。乃有白狐九尾而  
于禹禹曰白者吾服也。九尾者其證也。于是塗山人  
歎曰。綏綏白狐。九尾。應成于家室。我都悠思。于是  
要塗山女。○白虎通。狐九尾者何。狐死首丘。不忘本  
也。明安不忘危也。必九尾者何。九妃得其所。子孫繁  
息也。於尾何。明後當蓋也。○滑確居類書。郭璞贊音  
丘。奇獸。九尾之狐。有道翔見出。則銜書作瑞。周文以  
標靈符。亦王襄四子。講德論。文王應九尾狐。而東夷  
歸。周武王獲白負。諸侯同辭。然らるる祥瑞を奉たり亦  
海經。青丘山。九尾狐。能食人。食之不盡。又同書。青丘



之國有<sup>ニ</sup>狐<sup>ノ</sup>九尾<sup>ノ</sup>德至<sup>ニ</sup>乃<sup>チ</sup>未<sup>レ</sup>注<sup>ニ</sup>青丘國有<sup>ニ</sup>東海<sup>ノ</sup>之<sup>北</sup>也<sup>ノ</sup>  
此の九尾の狐の如く憎むべからざるべし  
亦按て小狐妖狐傳前の事や學集中卷第二は入道  
の注をまゝりやれハ文安己前の小説也、由來の事也

○酉陽雜俎段一成式云狐一夜擊尾火一出將<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>怪<sup>也</sup>戴<sup>ニ</sup>髑<sup>髏</sup>

髑<sup>髏</sup>拜<sup>ニ</sup>北斗<sup>ヲ</sup>髑<sup>髏</sup>不<sup>レ</sup>墜<sup>ル</sup>則<sup>チ</sup>化<sup>ス</sup>為<sup>レ</sup>人<sup>ト</sup>と<sup>リ</sup>り<sup>レ</sup>これ<sup>ハ</sup>因<sup>テ</sup>狐<sup>ノ</sup>髑<sup>髏</sup>を

戴<sup>ク</sup>て<sup>ハ</sup>物<sup>ヲ</sup>も書<sup>ク</sup>の圖<sup>モ</sup>画師<sup>ノ</sup>のま<sup>ニ</sup>え<sup>ト</sup>れ<sup>バ</sup>婦<sup>切</sup>もさ<sup>ら</sup>う<sup>レ</sup>これ<sup>を</sup>

去<sup>レ</sup>れ<sup>ト</sup>も<sup>レ</sup>れ<sup>ド</sup>も髑<sup>髏</sup>のま<sup>ニ</sup>限<sup>ラ</sup>ぬ<sup>マ</sup>亡<sup>友</sup>某<sup>ノ</sup>の語<sup>ニ</sup>嘗<sup>ト</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>ル</sup>

九月の比降<sup>ニ</sup>死<sup>ス</sup>る<sup>雨</sup>霽<sup>ム</sup>り<sup>レ</sup>ハ端<sup>ニ</sup>は<sup>草</sup>狩<sup>ヲ</sup>と<sup>ル</sup>女<sup>と</sup>ら<sup>ぬ</sup>事<sup>ハ</sup>

を<sup>誘</sup>引<sup>ク</sup>田<sup>中</sup>の捷徑<sup>を</sup>を<sup>由</sup>り<sup>野</sup>狐<sup>ノ</sup>の<sup>行</sup>き<sup>サ</sup>らん<sup>と</sup>る<sup>を</sup>さ<sup>ら</sup>う<sup>レ</sup>近<sup>ク</sup>

ま<sup>ら</sup>う<sup>レ</sup>られ<sup>バ</sup>の<sup>狐</sup>一<sup>條</sup>の<sup>枯</sup>草<sup>を</sup>を<sup>弄</sup>て<sup>野</sup>狐<sup>ノ</sup>を<sup>救</sup>ら<sup>う</sup>る<sup>林</sup>の<sup>葉</sup>を

拾<sup>ヒ</sup>つ<sup>ク</sup>の<sup>芦</sup>へ<sup>は</sup>ら<sup>ぬ</sup>く<sup>や</sup>り<sup>彼</sup>竹<sup>の</sup>の<sup>み</sup>よ<sup>の</sup>と<sup>る</sup>や<sup>あ</sup>ん<sup>音</sup>を<sup>と</sup>る<sup>密</sup>結<sup>を</sup>

く<sup>ま</sup>り<sup>と</sup>も<sup>一</sup>掛<sup>籠</sup>の<sup>蔭</sup>に<sup>集</sup>合<sup>ス</sup>り<sup>い</sup>ら<sup>ん</sup>た<sup>る</sup>狐<sup>の</sup>と<sup>も</sup>さ<sup>ら</sup>う<sup>レ</sup>ん

林<sup>の</sup>ま<sup>を</sup>さ<sup>ら</sup>う<sup>レ</sup>は<sup>し</sup>る<sup>と</sup>の<sup>芦</sup>吹<sup>痛</sup>の<sup>ど</sup>や<sup>ら</sup>ぬ<sup>項</sup>に<sup>結</sup>い<sup>タ</sup>り<sup>あり</sup>

一<sup>が</sup>忽<sup>ト</sup>え<sup>ん</sup>う<sup>う</sup>あ<sup>い</sup>ぬ<sup>う</sup>あ<sup>れ</sup>り<sup>の</sup>え<sup>ん</sup>と<sup>さ</sup>ら<sup>う</sup>る<sup>目</sup>の<sup>傾</sup>け<sup>たり</sup>後<sup>め</sup>一

と<sup>さ</sup>ら<sup>う</sup>先<sup>に</sup>なら<sup>ぬ</sup>ま<sup>の</sup>り<sup>つ</sup>亦<sup>ニ</sup>阿<sup>也</sup>く<sup>よ</sup>ひ<sup>う</sup>ひ<sup>ある</sup>独<sup>木</sup>橋<sup>の</sup>ほ<sup>と</sup>り<sup>は</sup>微

妙<sup>ら</sup>う<sup>た</sup>け<sup>たる</sup>女<sup>楓</sup>の<sup>いろ</sup>ら<sup>く</sup>流<sup>る</sup>一<sup>條</sup>を<sup>肩</sup>に<sup>か</sup>か<sup>り</sup>て<sup>ま</sup>り<sup>あ</sup>や<sup>ん</sup>た<sup>る</sup>い<sup>ま</sup>り

あ<sup>ら</sup>ん<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ぬ<sup>女</sup>さ<sup>ら</sup>う<sup>一</sup>と<sup>り</sup>疑<sup>ハ</sup>す<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ぬ<sup>今</sup>の<sup>野</sup>狐<sup>の</sup>め<sup>り</sup>の<sup>や</sup>ら<sup>う</sup>

疑<sup>ハ</sup>す<sup>一</sup>狐<sup>の</sup>程<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>ま</sup>り<sup>と</sup>ま<sup>あ</sup>く<sup>小</sup>石<sup>塊</sup>を<sup>と</sup>り<sup>て</sup>い<sup>く</sup>も<sup>化</sup>ぬ<sup>ま</sup>り

い<sup>く</sup>も<sup>吾</sup>怖<sup>を</sup>お<sup>そ</sup>い<sup>ん</sup>と<sup>罵</sup>り<sup>け</sup>ん<sup>を</sup>と<sup>り</sup>と<sup>む</sup>れ<sup>ば</sup>女<sup>の</sup>い<sup>く</sup>も<sup>と</sup>ら

て<sup>田</sup>の中<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ま</sup>り<sup>も</sup>や<sup>飛</sup>ぶ<sup>り</sup>ん<sup>ま</sup>り<sup>若</sup>ま<sup>あ</sup>る<sup>小</sup>松<sup>山</sup>に<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>り<sup>登</sup>る<sup>と</sup>ら

い<sup>く</sup>も<sup>の</sup>狐<sup>の</sup>い<sup>く</sup>も<sup>後</sup>方<sup>を</sup>さ<sup>ら</sup>う<sup>つ</sup>書<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>り<sup>の</sup>青<sup>の</sup>狐<sup>の</sup>妖<sup>る</sup>と<sup>ら</sup>ん

髑<sup>髏</sup>を<sup>戴</sup>き<sup>藤</sup>を<sup>敷</sup>く<sup>と</sup>ら<sup>ぬ</sup>れ<sup>と</sup>れ<sup>る</sup>限<sup>ら</sup>ぬ<sup>別</sup>に<sup>御</sup>ま<sup>る</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>と</sup>

い<sup>く</sup>も<sup>亦</sup>相<sup>摸</sup>の<sup>尊</sup>ま<sup>り</sup>五<sup>里</sup>を<sup>ま</sup>り<sup>甲</sup>列<sup>の</sup>か<sup>ら</sup>ぬ<sup>と</sup>ら<sup>う</sup>あ<sup>ら</sup>丹<sup>次</sup>と<sup>ら</sup>ぬ<sup>狐</sup>

よ<sup>く</sup>も<sup>字</sup>丹<sup>平</sup>と<sup>呼</sup>ぶ<sup>の</sup>の<sup>狐</sup>を<sup>怖</sup>る<sup>と</sup>世<sup>の</sup>人<sup>は</sup>怖<sup>れ</sup>ん<sup>は</sup>備<sup>へ</sup>る<sup>狐</sup>と<sup>ら</sup>ぬ<sup>狐</sup>

怖<sup>る</sup>と<sup>あ</sup>ん<sup>厚</sup>木<sup>の</sup>女<sup>人</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>ぬ<sup>狐</sup>の<sup>物</sup>と<sup>ら</sup>ぬ<sup>と</sup>ら<sup>ぬ</sup>と<sup>ら</sup>ぬ<sup>と</sup>ら<sup>ぬ</sup>



























とるも年山紀團靜齋隨筆亦字のを論下られたるは考漏されし

のりり今按じると玉海の安元三年四月二十日 宜旨依奉財神

藥給獄所 華とある條は田使俊行 藤原成直 五市

又貞觀軍記又字荒川を市字 斑月十郎ありと見えし其の難波早尾荒川

斑月と稱する後世の苗字あり苗字の字の則字の異なることと人の

ら五郎六郎など稱するを世に異うれ其難波と稱し早尾と稱する

まは子孫へ傳るをりて苗字とあり人のあつるの父を同苗と唱ふるその義

審なり俗誤辨又今の苗字とありの姓氏はあつた家号とありと苗字の

字の字のむつらざらむれば此の字と稱する事山の字とありとあり

士は苗字とあり市人は家号とあり亦これあり

○今人の名を名昔といひ字を俗名といふは古も右もか助もといふ苗官名あり

といふ世をさうられし就中藤内身内など稱するの職の人は限るなり

藤原氏の入内舎人なるは藤原と稱し平氏の入内舎人なるは平氏と

稱する他は目の姓なりといふと奈苗志志といふ王藏の三の姓なりと稱

原平二は田源なるのり今も身内藤原と書長男なりともを郎と稱

平氏の人源と稱し橘氏の人源と稱し清原なりとも清と稱する類なり

右實の稱されども今も平源なりとも怪むるなり

○彦のいふく前者の稱麻呂は良賤の自稱ありと中葉より下賤の力のも成と

稱し女年ありとも麻呂と稱するは人の名なりとも大なりともその時代を

推量するのぞかし白石先生の人名考に天つ武將の御名は凡人の唱る可

やくゆらぐらむるべしと室町殿代々の簿は流傳するありのあり室儀殿の

簿を義詮ともし死詮の字を教と唱る人のれど並廣院殿を義教と

まじりておろしむるなりと其の祖考の簿は同くは唱の名をいふなり

心は又詮の字を唱と唱る人なりと靈陽院殿を義昭と唱るなりとあり

カウカヘモヤ

宜旨依奉財神

藤原成直

斑月十郎

早尾

難波

家号

苗字

山

苗官名

藤原

平氏

藤原

清原

清

類

怪

中葉

下賤

凡人

室儀

並廣

義教

祖考

唱名

靈陽

義昭



也先祖の諱は同じ唱の君はけをあらべりて拾枚節用ホをりるるに於て  
詮の字を下と刻じ蓋宝逸院殿の諱をヨシトシとナセりまや身ぬる  
亦云大塔宮の御諱を護良とありてモリヨシとせよのいひ傳はれど  
モリナカとよじまはらざれぬれら又同時のころの義詮のころにせり  
いひ傳るるくまのいと記されたりけりも諱あらざるの唱ありて傳  
受あつていひ傳るるのすむらぬ南朝の將軍官懷良親王を世人只の  
イリヤウとのを續くとも大男をあらざりて貴人の諱ふの當時假字を附と  
後せよ傳まはるるにぞ傳るる

○東鑑 正治元年八月廿日の記に前日中將家 頼家 景盛  
を誅せられしに尼御臺所 政子 佐々木三郎兵衛入道とて親  
類志あゆみ傳ふ北條者親戚也仍て其人頗被寵愛芳情常令  
招座左右冷而令於被等輩無優賞刺皆令感實名給

之間各貽恨之由有其間所處於事令用意給者雖  
末一代不可有蓋吹儀之旨被蓋親練之御詞と録るる類  
類志に記すに君は北條の元老なりとていふも臣は乃君臣の間とらるる  
その実名を呼ぶるを恨とせり亦日知保善之江人君稱大夫字又為  
七三一人主呼人臣字とりて後考ふべし

○平家物語 治承元年五月廿日の天長殿主明雲大僧正公精を傳止  
らるる云云 陰陽師あべの泰親がすまはるるを智者の明雲とあり  
あふとらるるに日月の光をあらはるるに雲ありとてまんりる曲事  
子云 莊子の名者實之實也といひるるに文字を擇べり同書り  
清盤確録の中あり比よるるに白竹すまはるる一首の御筆  
そのをあらはるるに



疾のたるとなかりきよまのこほくきよまのたるとなかり

是よりして清盛のころのころとたてしつら曲亭子云平家朝貞盛より代り  
盛のころをより名とをり疑らる清く盛まるのちん秋へ後への附會を  
らんり清盛よその行を流しめしめ一門不忠義の高位高官を升せ  
らん富を欲せれば化するべにされば不審清くして盛まるん難き

○姓古人の名も今も同くやうて或い文字の音をりてあう一或い文字  
音と訓とをりて併せあう一その人の隨筆記よれば文字の勢も定りて  
平氏代 仁明天皇の御代より今の代への如くまうい文字の訓を取  
りて二字を用るといふなりゆきと神皇正統記よるされたり物 安康

雄略より 推古の間大には真鳥馬子あり 仁賢天皇の四年  
雄略より 推古の間大には真鳥馬子あり 仁賢天皇の四年  
雄略より 推古の間大には真鳥馬子あり 仁賢天皇の四年  
雄略より 推古の間大には真鳥馬子あり 仁賢天皇の四年

本後班 孝謙の御時よ柿本枝成 文徳の御時よ橘百枝南淵永河

清和の御時よト部て尿磨下野の藤子ホありてその國史に載るなりとの  
餘ホ免魚養丈養堅魚真鯨ホ勝てりゆりて亦教十代の御代を流

正親所院の永祿の比より楮圓の武士ホよ奇異ある名母なり

その十が二をりて山中鹿成幸盛秋宅庵成寺本生死成尤道理成敷

中前成小倉鼠成山上狼石成以上尼子 此の餘朝倉家の十八村堂河地

家の十八村堂大内家の十本村堂吉見家の八谷堂尼子家の九牛士

里見家の八六士牧宰又連のりてらる軍陣に臨る名生るとり敵よ

りかゝるをばえさるんことを戦せよ武備めりりりて又備はるの  
名の野のりてさゆの猛りて推るなり

○海客ある人の名は今おぼしめされたり亦おぼしめされたり小補り

伊豆の大場の子民よ東四郎太郎三郎 或い百太郎二郎ると呼







曲禮の名字者不以國不以日月不以隱疾不以山川

不以日月不以隱疾不以山川

不以隱疾不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

曲禮の名字者不以國不以日月不以隱疾不以山川

不以日月不以隱疾不以山川

不以隱疾不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川

不以山川











